

思いやりのバトン

東京都 小金井市立南中学校 3年

安齋 さくら (あんざい さくら)

ある日の夕方、私は奇妙な光景に出会いました。駅の改札口の前で、若い女性が四人、縦一列になり前の人の肩をつかんでつながってじっとしているのです。帰宅ラッシュの人混みの中、まるで電車ごっこをしているかのような女性たち。近くまで来て、私はその理由がわかりました。彼女たちは、白杖を持っていた。視覚障害のある方たちだったのです。

一緒にいた母が彼女たちに駆け寄り、声をかけました。

「大丈夫ですか。何かお困りでしたら、お手伝いします。」

母の声に反応して、四人が一斉にこちらに顔を向けました。

「お願いします。西武線と中央線、二つの改札があって、どちらに行けばいいのかわからなくなってしまったのです。」

母は、二つの路線のそれぞれの改札横の窓口に彼女たちを連れて行き、駅員さんにサポートをお願いしました。別れ際に、彼女たちが母の手を握って何度もお礼を言っていたのが印象的でした。

帰り道、私はずっとその光景を思い出していました。そして、私が「奇妙」だと感じた理由は、電車ごっこのような女性たちの姿だけではなく、彼女たちを目にしていながら何事もないように通り過ぎていく人々の様子にもあったことに気付きました。彼女たちの周りには、携帯電話をいじりながら待ち合わせをしているような人も大勢いました。しかし、まるで彼女たちが存在していないかのように、誰もが無関心でした。母が声をかけるまで、一体どれほどの時間を彼女たちはあの場所で立ちすくんでいたのでしょうか。もし自分だったら……と、私は目を閉じて想像してみても怖くなり、そして悲しくなりました。

母が、白杖を頭上に高く掲げている人がいたら、それは **SOS** のサインだと教えてくれました。しかし、彼女たちは誰も白杖を掲げていませんでした。調べてみると、そのサインは、視覚障害者の方たちですらまだ知らない人が多い、ということがわかりました。また、**SOS** のつもりで白杖を掲げたが、誰も声をかけてくれず悲しかった、という体験談も読みました。サインが世間に周知されることはもちろん重要です。しかし、それよりも、「誰かを気遣う気持ち」が広まってほしいと思いました。「困っていないかな」「大丈夫かな」と、思いやりを持って気遣うことができれば、サインがなくても助けになれるのです。

「バリア（障壁）フリー」は、様々な場所で進められていることがわかります。

段差をなくす、電光掲示板を設置する、音声案内を流す、など、物理的なバリアは取り除かれつつあります。しかし、最も大きなバリアは、私たちの心にあるのではないのでしょうか。困っている人に気付いても、自分には関係ないと思ったり、誰か他の人が助けるだろうと人任せにしたり、どうしたらいいかわからないからと見て見ぬふりをしたり——。「無理解」、「無関心」というバリアがなくなれば、私が駅で体験したような出来事は起こらないはずです。では、そのバリアを取り除くために必要なのは何でしょうか。私は、「想像力」と「勇気」だと思います。目を閉じて、初めて来た駅で人混みの中立っている自分を想像してみてください。車イスに乗っている自分が、階段しかない建物にいる場面を想像してみてください。とても不安で、「誰か助けて」と思うのではないのでしょうか。想像力を働かせれば、困っている人が求めていることに気付くことができると思います。そして、少しの「勇気」を出して、声をかければいいのです。

心のバリアフリーが実現できれば、その他のどんなバリアも乗り越えられると思います。

私の住む小金井市には、「障害のある人もない人も共に学び共に生きる社会を目指す小金井市条例」があります。その中に、「共生社会」という用語の定義が次のように書かれています。

『共生社会 差別を解消し、障害者と障害者でない者とが分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら、地域の中で共に手を取り合い安心して暮らすことのできる社会をいう。』

私たち一人ひとりの意識と思いやりの心が、社会を変えていくのだと思いました。私も母のように、困った人を見かけたらためらわず声をかけて手助けしようと強く思いました。

駅で、視覚障害のある女性たちを見送った後、母が言いました。

「思いやりのバトンがつながるといいね。」

彼女たちが家に着くまでの間、どうか彼女たちに優しく手を差しのべる人が現われますように。私もそう祈りました。